

下関市豊北町域における人物記念碑の調査報告

豊北歴史民俗資料館 安田 豊

はじめに

令和三年、下関市立豊北歴史民俗資料館（太翔館）では平成二二（二〇二二）年のリニューアル開館十周年を記念して、「豊北をひらいた人々」という現在の豊北という地域の形成に影響を与えた人物を取り上げる連続企画展（第二弾より特別展）を開催した。その第一弾は「記念碑に刻まれた人々」として、下関市豊北町（以下・豊北町）の各地域に建碑された先人たちの記念碑を紹介したものであった（写真1）。新型コロナウイルス感染症対策に伴う臨時休館の影響により、令和三年九月四日に開催予定であったものが同月二十八日開催となり、また、会期の短縮や一部イベントの中止などがあったものの企画展冊子の発売や記念講演の開催などは予定通り行うことができた。

本稿では、企画展を開催するにあたって実施した豊北町内にある記念碑の調査成果の内、一般層向けに単純化したため、企画展冊子では未掲載のものを主として報告するものである。

なお、記念碑には災害などを後世に伝えるための記念碑や、田地の圃場整備などの施工記念碑なども該当するが、本稿では「人物」の顕彰などを目的としたもの（文学碑含む）に限定する。



写真1 企画展の様子

1 記念碑とはなにか

本稿における記念碑の定義及び概要は、前述の企画展「記念碑に刻まれた人々」の冊子においてまとめている。以下、説明のため一部を改訂して引用する。

記念碑とは、ある出来事や人の功績などを記念して建てられる碑のことであり、主に石に文字を刻んだもの（石碑）のことを指す。現存する日本最古の記念碑は栃木県大田原市にある国宝「那須国造碑（なすくにのみやつこひ）」がある¹。この記念碑は、永昌元（六八九）年に那須国造で評督に任ぜられた那須直葦提（なすのあたいいで）という人物の事績を息子が顕彰するために七〇〇年（この頃年号なし）に建てられたものである。

このように、日本では古代より記念碑の建立が行われており、殊に近世以降のものはその多くが現存している。

また、一口に記念碑といっても、建てた人々の思いによって様々な種類に分類される。圃場整備の施工記念碑や過去の災害を未来に伝えるための碑などもあるが、殊に多く設置されたのが顕彰碑などの特定の人物の碑や、句碑などの文学作品を刻んだ碑である。

尤も、前述の事柄は記念碑に留まらず神社の鳥居や石灯籠、或いは寺院の釣鐘など、铸件などにも記される場合がある。更には、墓碑ともなると、元々ただの墓として作られたものが後年何らかの意味合いを持ち墓碑となった場合もあり、その分類自体が非常に曖昧なものとなっている。

○記念碑の種類

・顕彰碑、頌徳碑、表徳碑など

いずれも「人の手柄や徳などを褒め称える」ための記念碑である。広義においては同じものとみられ、明確な区別はされていないようだ（写真2・3）。

・句碑、歌碑、詩碑など

優れた文学作品を刻んだ碑。文学のカテゴリーによって呼び名は変わる。総じて「文学碑」ともいう。作品や文学者のゆかりの場所に設置される(写真4・5)。



写真4 田上菊舎句碑 (豊北町田耕)



写真2 中山太一顕彰碑 (豊北町滝部)



写真5 佐々木照山詩碑 (豊北町阿川)



写真3 藤岡周助表徳碑 (豊北町神田)

・その他

施工の記念碑や史跡の碑など、諸所の出来事に関連する記念碑が建立されている。また、墓が後年「墓碑」として扱われるようになる場合がある。豊北町においては、近世滝部において「奉公市」をひらいた鷲頭自見という人物の墓が、大正八八八八八八八八八八(一九一九年に発行された絵葉書(所蔵:太翔館)において「奉公市開墓の碑」と呼ばれるようになった事例がある(写真6・7)。



写真6 鷲頭自見墓碑 (豊北町滝部)



写真7 絵葉書に掲載された墓碑

これらの記念碑の多くは地元有志の手によって建立されたものである。また、碑に刻まれた文章は、現存する史料には残されていない情報を含んでいることが多く、郷土史を紐解く上で高い史料価値を持っている場合が多い。

2 下関市における記念碑

○先行研究

下関市内には、平成三(一九九一)年の時点で七二〇基の記念碑が確認されているが、未確認のものやその後建立されたもの、平成一七(二〇〇五)年に合併した豊北・豊浦・豊田・菊川の四町にある記念碑を含めると、少なくとも見積もっても八〇〇基をゆうに超えると思われる。地方都市にこれほどの数の記念碑が建立されていることは大変珍しく、下関市の特色の一つと言える。下関市における記念碑の調査研究は、平成一七年の市町村合併以前の下関市(以下:「旧市内」)においては同市教育委員会によって詳細に行われており、昭和末期から平成初頭にかけて『下関の記念碑』という記念碑の詳細な情報を記した書籍が三シリーズに亘って刊行されている。また、市町村合併によって下関市の一部となった、豊北・豊浦・豊田・菊川の四町においては、各町が発行した町史に一部の情報は掲載されているものの、簡易的に記すに留まり、未掲載のものも多数存在すると思われる。その他、西村勇氏が山口県内の文学碑を調査し、採拓および翻刻を行い昭和末期に『防長文学碑採拓行』と『続・防長文学碑採拓行』を刊行している。豊北町においては、豊北町教育委員会が児童の郷土教育のために発行した『わたしたちのまち ほうほく』(平成五年改訂版より)で、郷土をひらいた人物の紹介として、町内にある記念碑の分布図を掲載している。また、豊田町においては令和二年に郷土史団体「ふるさと豊田の歴史塾」が同町内の記念碑の他、鳥居や狛犬などを紹介した『豊田の石造物』を刊行するなど、四町においての記念碑の調査は現在進行形で行われている。しかし、各町域に建碑された記念碑の数は膨大なものであり、その多くは未調査のままとなっていると思われる。山口県における社寺建築や石造美術研究の第一人者であった内田伸氏は、古代〜中世までの山口県下の金石文についてまとめた『山口県の金石文』(平成二年発行)内の序論において、近世以降の金石文を対象としなかつ

たことに對し、以下のように述べている。

「…江戸時代になると、時代が新しいからというのではなく、対象とする金石文は飛躍的に数がふえ、それを全部記録することは到底できなくなるからである。そうすると、江戸時代以降のものは、墓碑とか顕彰碑とか、文学碑とか、更に鳥居、石燈籠(本文ママ)、鐘などという風に部門をきめて、それを悉く皆調査するというようにしなければならぬまい。」

このことは記念碑にも言えることであり、国内の古い時代のものが経年により消失してしまった可能性を差し引いても、近世以降飛躍的に増えたものと思われる。その全てにおいて詳細な調査が行われているわけではないのである。

○下関市における記念碑の管理について

下関市内に建てられた記念碑の内、基本的に個人所有のものは所有者、行政が管理する場所にあるものは行政が管理していると思われる。但し、本稿を執筆するにあたり、僅かながら聞き取り調査を行ったが、地域住民の方々が清掃作業や周辺の除草作業を行う場合もあり、行政上の所有者とは別に、実状「どこがどの範囲まで管理しているか」については不透明なものとなっている。

○豊北町の概要

記念碑が郷土史を紐解く上で高い史料価値を持っている場合が多いことは前章においても触れたが、そもそも記念碑が建てられることは、その地域の歴史・文化に影響を及ぼすものがあつたからであり、地域の歴史を知ることが建碑の理由を知ることにつながる。以下、豊北町の歴史について簡単に紹介する。

豊北町は下関市北部に位置し、北部・西部は響灘や日本海などの海に面しており、東部・南部は山々に囲まれた自然豊かな地域である。

古代には角島のワカメが平城京へと貢納されていたことが、平城京趾より出土した木簡よりわかつている。中世には東部にある肥中港が、当時山口を支配していた大内氏と李氏朝鮮との貿易拠点となっていた。近世中頃には漁業が盛況となった。また、それに伴い海岸部の人口増加に比例して、農作物の需要も増加し、農業従事者は人員不足に悩まされることとなる。その頃豊北の中央内陸部にある滝部では、奉公市と呼ばれる求職を目的とした市が開かれるようになり、漁村の労働力が農村に供給されるようになった。また、阿川・滝部を治めていた毛利家「一門八家」の一つ阿川毛利家の七代毛利広漢が郷校「時習館」を開き、以降、豊北には好学の精神が根付くこととなった。時代は下り昭和三〇(一九五五)年に阿川・粟野・神玉・神田・滝部・田耕・角島・北宇賀(一部)の八ヶ村が合併し、豊北町となり、更に平成一七年には、他の三町とともに下関市へ合併した。⁵⁾

3 豊北町における記念碑の調査成果

豊北町域における記念碑は、『豊北町史二』(平成六年発行)によると、二九基と記されている。⁶⁾令和三年九月の企画展では、豊北町域における記念碑の内、個人所有のもの(一部許可を取り紹介)と、一般開放されていない小学校などの施設を除く二一基の記念碑を紹介した。その内の半数近くは未読のものとなっている。以下、それらを紹介したい。なお、先行研究において既に取り上げられているもの内、誤読のあるものも併せて紹介することにする。

〔凡例〕

※本稿で取り上げる記念碑は、豊北町にある人物記念碑の内、現在の豊北町にあたる地域の出身、あるいは地域で活躍した人物のものに限定する。

※許可を得た一部のものを除き、個人所有のものなどは除外した。また、未

調査のものも除外している。

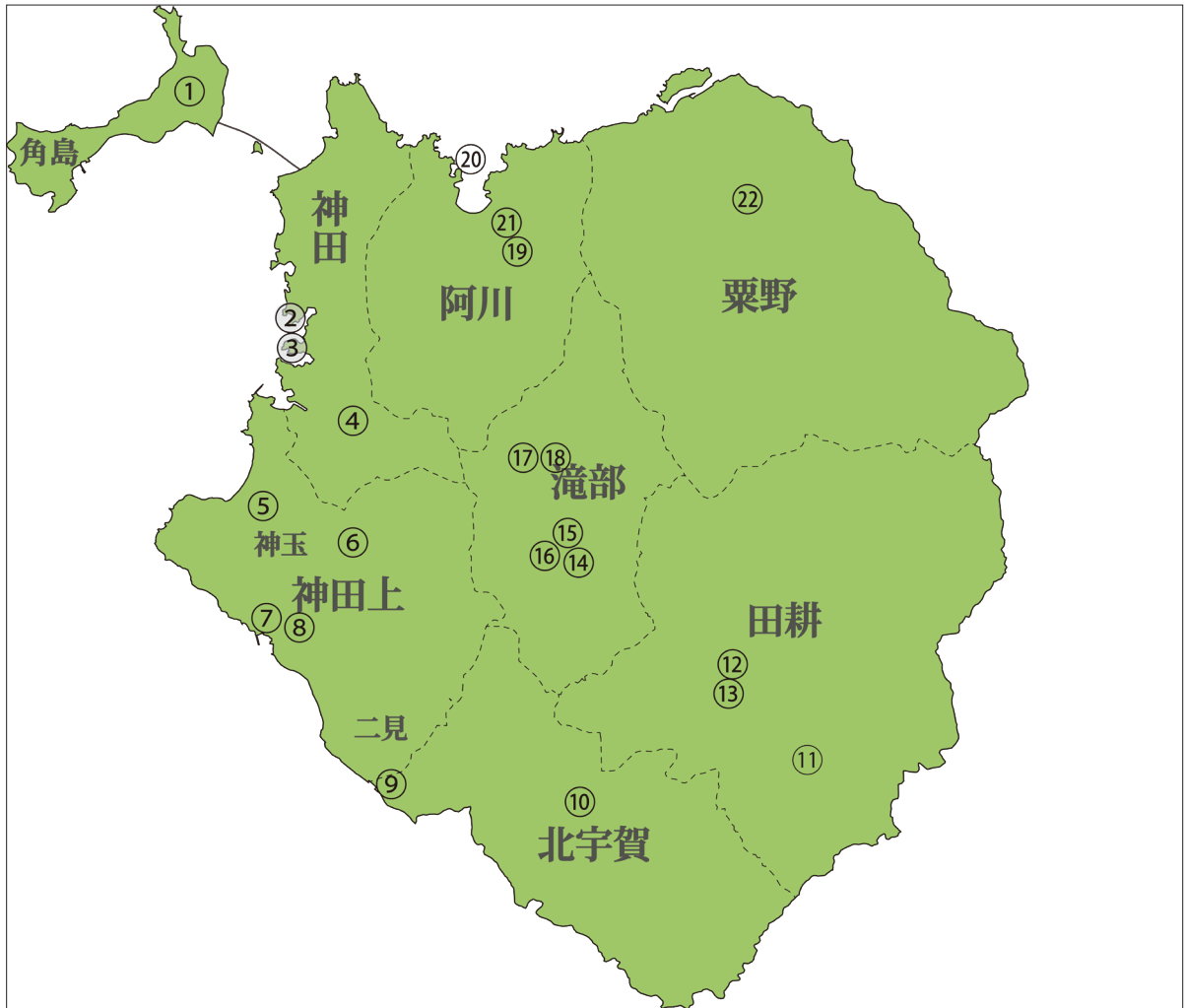
※碑文の翻刻文の内、ワードで表示されない字については、一部は作成し、漢字に使用する踊り字(ゝ、ゝ)を縦に二列並んだもの。二の字点)は「々」で代用した。

※本稿の調査は令和二年十二月より、追調査を含めて令和四年一月まで行った。使用している現地の写真はその期間に撮影したものである。

※調査成果の内、寸法はセンチメートル単位で表記。

No.	名称	建立年月日	建立した団体等	功績	所在	翻刻
①	中本たか子歌碑	平成元年 (一九八九年) 一月吉日	有志一同	プロレタリア文学作家として優れた作品を残す。	中本たか子生家跡	『記念碑に刻まれた人々』冊子
②	酒田整吾翁頌徳碑	昭和二六年 (一九五一年) 十二月	(地区民)	神田上村の村長を務め、漁業の発展に尽力する。	蛭子社(肥中地区)	本稿
③	和田栄太郎翁之碑	昭和六年 (一九三一年) 十月	特牛篤志	特牛に簡易水道を設置。慢性的な水不足を解消する。	蛭子社(特牛地区)	『記念碑に刻まれた人々』冊子
④	石川先生之碑	大正四年 (一九一五年) 五月二七日	生徒中	亡くなった分教場の先生か。	鳴滝公民館	本稿
⑤	西島実行先生碑	大正九年 (一九二〇年) 五月	門人	神官。近代初頭の教育者。	土井ヶ浜遺跡 国道191号線沿い 招魂社の裏	本稿
⑥	藤岡周助翁表徳碑	大正四年 (一九一五年) 五月一有二日	有志	私財を投じて公業に益す。	大字神田上字上野	『豊北町史』
⑦	平川太治郎碑	明治二一年 (一八八八年) 春	本田幸三郎 重岡久平	海境争いの時に功績有り。	観音堂	本稿
⑧	大賀基作翁像	昭和四一年 (一九六六年) 五月吉日		村民に慕われた村長。	齋八幡宮境内	本稿
⑨	山本与市之碑	明治三〇年 (一八九七年)	顕彰文 :大島迺十吉	明治の頃、人体解剖に自らの体を差し出した。	二見公民館	本稿
⑩	小田宗市翁碑	昭和十二年 (一九三七年) 八月	(地域住民)	造林に生涯をささげた。	長井手橋周辺	本稿
⑪	福澄茂信之碑	明治二六年 (一九一三年) 八月	福澄十蔵	郷土の原野を開き、治水事業を行う。	田耕字原 国道435号線沿い	『豊北町史』
⑫	田上菊舎句碑 「月を笠に着て 遊ばゞや旅のそら」	大正七年 (一九一八年) 四月三日	顕彰文:和田文 建碑:橋舎	諸国を行脚しながら優れた文学作品などを残す。	田耕公民館	『続・防長 文学碑探拓行』
⑬	田上菊舎句碑 「故郷や名もおもひ出す草の花」	昭和三年 (一九二七年) 五月	菊舎顕彰会	諸国を行脚しながら優れた文学作品などを残す。	旧田耕小学校	『続・防長 文学碑探拓行』 本稿
⑭	鷲頭自見墓碑 (奉公市開基の碑)	宝永三年 (一七〇六年) 九月七日	不明	奉公市の創始者。	末森山	『記念碑に 刻まれた人々』冊子
⑮	烈婦登和碑	大正五年 (一九一六年)	顕彰文:吉田松陰 建碑:地元有志 中山太一	60余州を遍歴して、父等の仇討ちを果たす。	滝部八幡宮	『豊北町史』
⑯	中山太一顕彰碑	昭和四一年 (一九六六年) 十月十八日	滝部地区 新生協議会	化粧品会社を設立。私財を投じて郷土の教育事業等に貢献。	下関市立 豊北歴史民俗資料館	『記念碑に 刻まれた人々』冊子
⑰	蒲生鳳林墓所碑	昭和五三年 (一九七八年) 五月	蒲生鳳林顕彰会	私塾「中山館」を開き、優れた人材たちを育成する。	墓地(滝部田代)	『記念碑に 刻まれた人々』冊子
⑱	蒲生鳳林墓碑	文化十一年か (一八八四年)	顕彰文: 國島宏	私塾「中山館」を開き、優れた人材たちを育成する。	墓地(滝部田代)	『豊北町史』 本稿
⑲	藤田松之介碑	昭和十一年 (一九三六年) 五月一日	区民	阿川村の村長を務め、産業の発展に尽力する。	河内 コミュニティセンター	『豊北町史』
⑳	佐々木照山詩碑	昭和四年 (一九二九年)		蒙古のトルホト王を日本に連れ帰り、「蒙古王(もうこおう)」の異名をとった。	日和山	『続・防長 文学碑探拓行』
㉑	釜嶽脇先生之碑	明治四二年 (一九〇九年) 二月六日	門下生	阿川文学寮の教授。	海翁寺	『豊北町史』
㉒	吉広弥太郎先生頌徳碑	昭和五二年 (一九七七年) 二月	佛教実践婦人会、 幼稚園、明之学舎、 その他結縁の同志	「私立粟野幼稚園」創設者。幼児教育に尽力する。	粟野幼稚園跡地	本稿

豊北町域における主な記念碑一覧表



豊北町域における主な記念碑分布図

番号	人名	年代	一七〇〇	一七五〇	一八〇〇	一八五〇	一九〇〇	一九五〇	二〇〇〇
⑬	鷺頭自見		■						
⑭	蒲生鳳林			■					
⑬	田上菊舎			■					
⑪	福澄茂信			■					
⑦	平川太治郎			■					
⑩	脇範甫			■					
④	石川先生				■				
⑤	西島実行				■				
③	和田栄太郎				■				
⑩	小田宋市				■				
⑬	藤田松之介					■			
⑨	山本与市				■				
⑩	佐々木照山					■			
②	酒田整吾					■			
⑧	大賀基作						■		
⑬	中山太一						■		
⑫	吉広弥太郎						■		
①	中本たか子							■	
⑬	とわ(登和・登波)					幕末～	明治頃の人物		
⑥	藤岡周助								明治頃の人物?

記念碑に刻まれた人々の時系列一覧表

②酒田整吾翁頌徳碑 (写真8)



写真8 酒田整吾翁頌徳碑

所在 下関市大字神田肥中(蛭子社)
年代 昭和二六(一九五二)年
寸法 一九七×九九
碑文

○正面
酒田整吾翁頌徳碑

○側面(正面右側)
昭和二十六年十二月
肥中漁業協同組合

所見

正面の「田」の部分を通るように一筋のヒビが入っている。正面の「酒」の字の横(正面から見て右側)及び正面の頂部付近に黒ずんだ傷のようなものがある。

肥中港入口に鎮座する蛭子社の傍、港に入った人の目に付く場所に建碑されている。(写真9)

碑は自然石が使用され、刻書された部分のみ平坦に磨かれている。



写真9 肥中地区蛭子社(港の入口付近に建碑されている)

④ 石川先生之碑 (写真10)



写真10 石川先生之碑

所在 下関市豊北町大字神田(鳴滝公民館)
 年代 大正四(一九一五)年
 寸法 二一六×五六
 碑文
 ○正面
 石川先生之碑
 生徒中
 大正四年五月二十七日建之焉

○側面(正面からみて右側下部)から背面

工□

石工

西島清吉

明治三十六年十二月八日寂

享年五十三才

所見

現在鳴滝公民館が建つ場所は、かつては保信小学校(後神田尋常高等小学校鳴滝分教場)があり、昭和三二(一九五七)年に廃止されるまで長く学び舎として使用されていた。「石川先生」がどのような人物であったかは不明であるが、明治一二(一八七九)年に同校が創立し、石川先生の没年が明治三六(一九〇三)年であることから、分教場の先生であった可能性が高い。

背面に「石工」についての刻書があり、「石工」の右に「工」の字が刻まれている。事実関係は不明であるが、その下に途中まで彫られた字(「西」カ)があることから、単純な彫り間違いの可能性がある(写真11)。

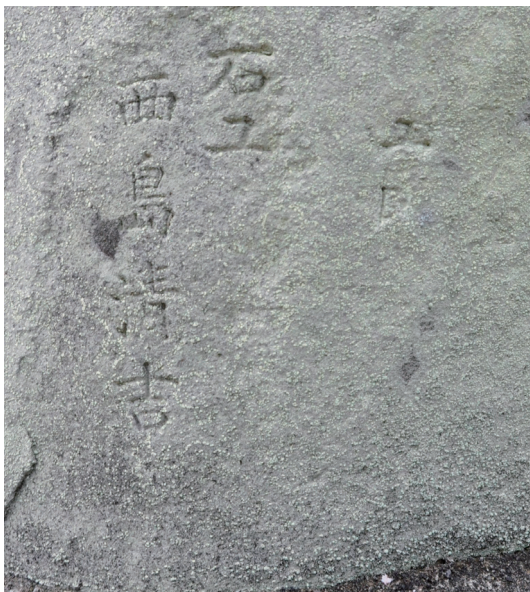


写真11 背面の刻書

⑤西島実行碑(写真12)



写真12 西島実行碑

○背面

西島先生名實行明治十二年六月又新小學校教員奉職専心努教育終始如一日熱誠盡職而於其餘暇施青年補修教育以自樂焉明治二十年五月有事故遂退職雖然子弟尚慕先生德學於門者常不絕先生亦愛撫子弟温情如慈父其感化及地方蓋可謂多大矣大正五年十一月八日病没年六十二
大正九年五月門人建之

所見

ヒノキ科の街路樹に隣接しており、正面はほぼ覆われている状態(写真13)。正面の刻書は、字の墨塗りが残っている。

自然石に刻書されており、表面の凹凸が激しい。状態は良。

所在 下関市豊北町大字神田上(招魂社境内)
年代 大正九(一九二〇)年
寸法 一五〇×四七
碑文
○正面
西島先生碑



写真13 碑の正面を覆うように樹が生えている様子

⑦平川太治郎碑(写真14)



写真14 平川太治郎碑

所在 下関市豊北町大字矢玉(観音堂)

年代 明治二二(一八八八)年

寸法 九八・五×四五・四

碑文

○側面(正面より右側)

発起人 当浦六中

于時明治二十一年春日

率活人 本田幸三郎

重岡久平

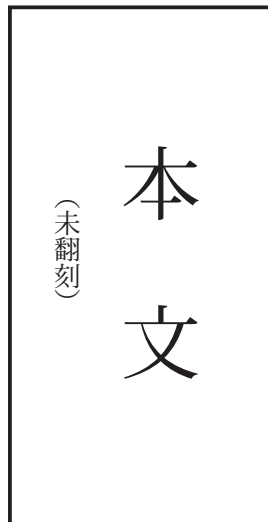
○側面(正面より左側)

平川太治郎

所見

碑は観音堂の裏手に、周辺より集められた墓石などと一緒に置かれている。正面の碑文は風化や経年の汚れ等のためか、完全な翻刻の難しい状態であり、本稿には間に合わなかった。後世の研究のため、読解済の場所より、意味の通る箇所のみ掲載する。

碑文(正面)



平川翁碑

代々経しも不易や

松の花高き

夜珠

観魚亭

孤舟

⑧大賀基作翁像 (写真15)



写真15 大賀基作翁像

所在 下関市豊北町大字矢玉 (齋八幡宮)

年代 昭和四一 (一九六六) 年

寸法 一八六×三四〇

碑文

○正面

大賀基作翁像

○背面

昭和四十一年五月吉日 建之

所見

齋八幡宮境内の社殿と向かい合う位置に建碑されている。状態は良。八幡宮の参道には、基作が石垣工事の費用を寄附したことを示す碑も建てられている (写真16)。



写真16 石垣工事寄附の碑 (矢玉)

碑文 (寄附記念碑)

石垣工事費寄附記念碑

一金貳千六百五十円

大賀基作

一金壹千五百円

當浦中

⑨ 山本与市之碑 (写真17)



写真17 山本与市之碑

○側面 (正面右側)

山本與市豊浦郡宇賀村二見浦人也□老父享母明治十七歲偶患
肺□請治於大阪享病院□石兼□與市□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
部郡會幹事古谷老以死茲解剖之等□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
兼奉其□終以明治廿四年五月十六日歿享年二十有□乃如遺囑會

所見

碑は四角柱に成形された花崗岩。現在は二見公民館にあるが、近隣より集められたと思われる石仏たちと共にあるため、別の場所より移設された可能性あり。碑は正面より右側の風化が激しく、剥離した痕跡も散見する。未翻刻の文字もあるが、碑文は左の通りの内容と思われる。

所在 下関市豊北町大字北宇賀 (二見公民館)
年代 明治三〇 (一八九七) 年

寸法 一六四×三二・五

碑文

○正面

山本與市之碑

○側面 (正面左側)

頭川田龍雄他二十一名相會解剖于二見墓地戸長西島九郎反有
志輩求會葬者僉感泣曰嗚呼豊浦郡中為病理頭解剖者以器為萬
矢矣其志實可歎稱也於之相議建碑以應放不朽 廣並求圓撰

明治三十稔五月中記

大島迺十吉

他の記念碑に刻まれた人物とは異なり、生前大きな功績を残した人物ではないため、文献史料に乏しく、この碑は山本与市の情報を後世に伝える数少ない史料といえる。

⑩小田宗市翁碑 (写真18)



写真18 小田宗市翁碑

所見

正面の「元」の字は、『豊北町史』に掲載された写真では刻まれていないが、後世追加されたものと考えられる。現在架かっている橋は比較的新しいものである(写真19)。字は元々内部を墨塗りしていた痕跡があるものの、前述の「元」の字を除き、剥げ落ちている。

欠損は殆ど見られないものの、白い斑点や黒ずみ等の汚れが多々見られる。正面から見て右側の字は若干風化の痕跡が見られる。この部分は現在古い民家に面しており、風化するような立地条件ではないため、碑の移動があったものと推測できる(写真19)。

所在 下関市豊北町北字賀
年代 昭和一二(一九三七)年
寸法 七五・五×三二・六
碑文

○正面

元長井手橋寄附 小田宗市翁

○側面(正面右側)

昭和十二年八月 竣成



写真19 現在の長井手橋

⑫ 田上菊舎句碑 (写真20)



写真20 田上菊舎句碑

所在 下関市豊北町大字田耕(田耕公民館)

年代 大正七(一九一八)年

寸法 一六七×五三

碑文

○正面

一字庵菊舎碑

○背面

月を笠に着て遊ばゞや旅のそら

文壇の俊豪故田上菊舎尼本村出身

にて其漫遊の首途に就きしとき前記の句あり

大正七年四月三日 橘会建之

所見

全体に白または黄土色の斑点が見られる。刻書は『続・防長文学碑採拓行』において翻刻が掲載されているが、誤字が見られたため再翻刻したものを本稿に掲載した。

背面の「月を笠に着て遊ばゞや旅のそら」は、二十九歳の田上菊舎が漫遊の旅を始める時に詠んだ句。正面の「一字庵」とは田上菊舎の庵号であり、現在も続いている。

現在、碑が建つ場所はかつて中学校であった場所だが、太翔館所蔵の近代期の写真などを見ると背景が一致せず、幾度か場所を移動した可能性がある(写真21)。



写真21 句碑の前での記念撮影(山戸氏寄贈)

⑱ 蒲生鳳林墓碑 (写真22)



写真 22 蒲生鳳林墓碑

所在 下関市豊北町大字滝部田代
年代 文化一一(一八一四)年か

寸法 六一×二七

碑文

○正面

鳳林先生墓

○側面 (正面より左側)

是鳳林蒲生先生之墓也先生本姓滕諱貞固
字整鳳林其號世任 宗藩阿川君先生官歴
邑宰耳目至宰告老後不勞以政而委以学教
授中山館文化十一年正月十三日疾卒壽七
十六配熊井氏生三子長曰大助嗣次曰小助
為森脇氏後次女適其氏禫之月門人建碑表

○背面

墓属余作銘以余亦嘗問字於門知其生平故
也暗記經典交互發義不假註脚歴涉史傳隨
涉隨抄動成卷帙其應問也如取物於囊其下
辭也一二擇於千百盖先生之學邪恭儉持身
敏捷從事得也後已勞也先人與俗俯仰而不
失其正不與物忤而能致其誠盖先生之德邪

○側面 (正面より右側)

自其下帷生徒前後百數循々善誘如時雨之
至苗者秀ヒ者實穰々焉嗒々焉亦不知其所
以自進而進矣是先生之作人也其銘曰來為
人師去見追思去者曰疏請見斯碑

弟子 長府藩儒臣國島宏謹誌

所見

刻書の風化はほぼないが、全体的に白い斑点が出来ている。『豊北町史』にも翻刻は掲載されているが、誤読が多いため、再翻刻したものを本稿に掲載した。墓地の入口には「蒲生鳳林墓所碑」が建碑されている。

② 吉広弥太郎先生頌徳碑 (写真23)



写真 23 吉広弥太郎先生頌徳碑

所在 下関市豊北町大字粟野 (粟野幼稚園跡地)
年代 昭和五二(一九七七)年
寸法 一四四・四×二七二

碑文

○正面

吉廣彌太郎先生

頌徳碑

物は心を以て

受くべし

法は身を以て

受くべし

昭和五十二丁巳年二月 建之

所見

弥太郎の創立した「粟野幼稚園」跡地に建碑されており、大きな自然石に刻書されている(写真24)。人物の概要は碑の正面からみて左側に銅板で設置されている。状態は良。



写真 24 粟野幼稚園跡

おわりに

以上が豊北町内に建てられた人物記念碑の簡単な調査記録となる。企画展の冊子において、記念碑の碑文などを基に人物の繋がりについて簡単な考察を行ったが、限られた史料の情報だけで学術的な考察を行うには、豊北町のみならず、最低でも市内全域の記念碑を調査し、傾向などをみる必要がある。それは今後の課題としたい。

《註》

- (1) 大田原市ホームページ内「大田原市の文化財一覧表」より。
- (2) 『下関の記念碑(山陰地区・補遺編)』(下関市教育委員会 一九九二年) 一三三頁
- (3) 前掲註(2)
- (4) 『山口県の金石文』(内田伸 一九九〇年) 十頁
- (5) 『記念碑に刻まれた人々』(下関市立豊北歴史民俗資料館 二〇二二年) 二頁

※一部改訂

- (6) 『豊北町史二』(豊北町史編纂委員会編 一九九四年) 一一九八頁
- (7) 豊北郷土文化友の会の阿部和正氏及び菊舎顕彰会顧問岡昌子氏にご協力いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。
- (8) 前掲註(5)

《参考・引用(五十音順)》

- ・内田伸 『山口県の金石文』 マツノ書店 一九九〇年
- ・大田原市ホームページ <https://www.city.ohlawara.tochigi.jp/docs/2013082778383/>
- ・藤井較一 「特牛港の水事情」『にぎめ 第6号』 豊北町郷土文化研究会 一九八九年
- ・下関市教育委員会編 『下関の記念碑(山陰地区・補遺編)』 下関市教育委員会 一九九二年

- ・豊北郷土文化友の会編 『図録 豊北の街道』 豊北郷土文化友の会 二〇一五年
 - ・下関市立豊北歴史民俗資料館 『記念碑に刻まれた人々』 二〇二一年
 - ・岡昌子 『生誕二百五十年記念 雲遊の尼 田上菊舎』 菊舎顕彰会 二〇〇三年
 - ・西村勇 『続・防長文学碑採拓行』 独楽庵 一九八七年
 - ・豊北町史編纂委員会編 『豊北町史』 豊北町役場 一九七二年
 - ・豊北町史編纂委員会編 『豊北町史二』 豊北町 一九九四年
 - ・豊北町教育委員会編 『わたしたちのまち ほうほく』 豊北町教育委員会 二〇〇三年
- (改訂発行)